

平成29年度 日本育療学会第21回学術集会 「改めて医療と教育の連携—もう一步前に進めるために—」参加報告

土屋忠之

(インクルーシブ教育システム推進センター)

要旨：日本育療学会は病気や障害のある子どもが充実した生活が営まれるように、教育、医療、福祉、家族の関係者が一体となって研究・研修を推進し、その成果を普及するために設立された学会であり、理事や会員に病弱教育関係者が多い。筆者は病弱教育に関する最新の情報や課題を取集するために、今年度を含め、毎年、学術集会に参加している。そこで学会の設立目的や主な活動内容等の概要を説明し、その上で今年度の学術集会の意義や概要について報告する。今回の学術集会については、医療と教育との連携という学術集会のテーマに沿って行われた学術集会長講演及びシンポジウム、そして国立特別支援教育研究所の研究者が行った研究発表を中心について報告する。

見出し語：他機関連携、学校間連携、復学支援、小児がん、精神疾患及び心身症

I. はじめに

日本育療学会は平成6年に設立された学会であり、設立の目的を「病気や障害のある子どもの現在及び将来にわたって、充実した生活が営まれるようにするために、教育、医療、福祉、家族及び本会の目的に賛同する関係者が一体となって、子どもの健全育成を図るための研究・研修を推進し、その成果を普及すること」(西牧, 2011)としている。この目的は、現在のインクルーシブ教育システムを構築するうえで欠かせない視点である「医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、社会全体の様々な機能を活用して、十分な教育が受けられるよう、障害のある子どもの教育の充実を図る」(文部科学省, 2012)ことに通ずるものがあり、設立当初から多職種連携を土台にしてきた日本育療学会の重要性は、近年さらに高まっているともいえる。

さて、日本育療学会は学会名に病弱教育の名称が入っていないものの、加藤安夫氏(横浜国立大学名誉教授・元文部科学初等中等教育局特殊教育課病弱教育担当教科調査官)・伊戸川真則氏(元埼玉県立寄居養護学校校長・元全国病弱虚弱教育研究連盟理事長)らが発起人となって設立し(西牧, 2011)、これまで多くの病弱教育関係者が理事長や理事を務めて

いる学会である。また今回の様な学術集会を年1回開催しており、設立初年度の平成6年には第1回目が開かれている。会員数は300名程という比較的小規模な学会ではあるが、会員には教育関係者を中心にしながら、医療、福祉、当事者、家族等、多様な立場の方が多く、病弱教育を推進や実践をしている主な関係者が会員となっている学会でもある。これまでの学術集会では、毎年100名以上の参加があり、研究者からの研究発表だけでなく、教員や看護からの支援に関する実践発表、当事者の立場からの発表等、様々な内容の発表が行われているのも特徴の一つといえる。近年の学術集会のテーマを表1に示すが、この3年間は「地域で暮らす病気の子どもの家族の支援～未来を支える他職種間の連携～」(第20回)、「病気や障害のある子どもを支える仕組みについて知ろう—教育・医療・福祉による新たな連携を求めて—」(第19回)となっており、今回のテーマを含め、どの回にも「連携」の文字が含まれている。これは教育・医療・福祉・家族が会員となっている育療学会の方向性に沿ったテーマであるとときに、インクルーシブ教育システムを構築する上で関係機関の連携がさらに重要視されているためであると考えられる。

設立と同時に学会誌「育療」の発行も開始し、こ

学会等参加報告

れまでに 61 号が発行されている。設立当初の学会誌の特集を表 2 に記載したが、1 号では「心身の健康に問題をもつ子どもの現状と課題」、2 号では「親の立場から教育・医療・看護・福祉に期待」という現在の病弱教育にとっても重要となる特集が設定されており、3 号にはすでに「教育実践を通して医療・家庭・福祉と連携」という今回の学術集会のテーマへとつながる特集が設定されている。近年の特集については、表 3 に示したが、61 号では「病弱教育におけるキャリア教育」、60 号では「病弱教育と発達障害」、58 号では「特別支援教育とインクルーシ

ブ教育」という病弱教育が近年取り組んでいる具体的な課題についてのテーマが設定されている。

また年 1 回の学術集会の他に、全国各地域において小規模研修会を開催も開催されており、今年度は認定 NPO 法人難病のこども支援全国ネットワークと連携して山梨県にある「あおぞら共和国」にて病弱や障害のある子供たちへの支援施設の見学を実施し、多くの教育関係者が参加している。これも教育、医療、福祉、家族が一体となって子どもの健全育成を図る研修を推進する役割を担っているこの学会の特徴ともいえる。

表 1 近年の学術集会のテーマ

回	特集	年 月
17	自分らしく生きるために－ ータルケアの充実を求めて	2013 年 8 月
18	病気の子供を支える教育・医 療・福祉－授業研究を中心と して－	2014 年 8 月
19	病気や障害のある子どもを支 える仕組みを創ろう－教育・ 医療・福祉による新たな連携 をもとめて－	2015 年 8 月
20	地域で暮らす病気の子どもと 家族の支援～未来を支える他 職種間の連携～	2016 年 8 月
21	改めて医療と教育の連携－も う一歩前に進めるために－	2017 年 8 月

表 2 創刊時の学会誌「育療」の特集

号	特集	発行
1	心身の健康に問題をもつ子ども の現状と課題	1995 年 5 月
2	親の立場から教育・医療・看護・ 福祉に期待	1995 年 10 月
3	教育実践を通して医療・家庭・ 福祉と連携	1996 年 3 月
4	医療の進歩に伴う家庭・学校で の生活の変化と生活上の留意点	1996 年 7 月
5	第 2 回学術集会並びに第 1 回研 究・研修概要	1996 年 10 月

II. 第21回大会の要旨

日本育療学会第21回学術集会は、平成29年8月26日（土）～27日（日）に岐阜県岐阜市にて実施され、テーマは「改めて医療と教育の連携－もう一歩前に進めるために－」であった。学術集会長は岐阜聖徳学園大学看護学部の大見サキエ教授であり、今回のテーマを設定した理由として「昨今では多職種連携というキーワードが様々な専門分野の学会で見受けられるが、本学会は早くからその多職種連携の考え方を土台に実践と研究を推進」してきたとし、「今回は連携のうち、医療と教育を焦点にさらなる連携強化」を目指すためとしている（日本育療学会 第21回学術集会 抄録集より）。このような趣旨のもと行われた学術集会ということもあり、参加者には通常の学術集会と比べると比較的、医療関係者が多い印象を受けた。内容は、講演、口頭発表、ポスター

表 3 近年の学会誌「育療」の特集

号	特集	発行
57	心身の健康に問題をもつ子ども の現状と課題	2013 年 3 月
58	特別支援教育とインクルーシブ 教育	2015 年 1 月
59	第 18 回学術集会（上越大会）報 告	2016 年 5 月
60	病弱教育と発達障害	2017 年 2 月
61	病弱教育におけるキャリア教育	2017 年 3 月

学会等参加報告

発表、シンポジウムで、参加者は110名程度であったが、すべて1つの会場で行われたこともあり、参加者が一体感をもてるような会であった。

今回の学術集会のプログラムを表4に載せたが、プログラムの中で特に学術集会のテーマに沿って行われたのが、学術集会長講演、基調講演及びシンポジウムであり、それらに内容に共通するキーワードが「復学支援」であった。復学支援とは、退院後に病院にある特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級から転学して前籍校へ復帰する際に行われる支

表4 日本育療学会第21回学術集会プログラム

1日目 8月26日(土)

開会式

学術集会長講演

「病気療養児の復学支援体制の構築—現状と課題—」

大見サキエ(岐阜聖徳学園大学看護学部 教授)

口頭発表

特別講演

「日本育療学会は何を求めてきたのか。そしてこれからは、何を求めていくべきか～私案～」

横田雅史(帝京平成大学現代ライフ学部 教授)

2日目 8月27日(日)

ポスターセッション

基調講演「小児がん診療と長期入院患者への学習支援、復学支援の試み—名古屋大学病院の場合—」

高橋義行(名古屋大学大学院医学系研究科 教授)

シンポジウム

「がんの子どもへの復学支援から連携を図る—当事者の支援につなげるために医療・学校の状況をもっと知ろう!—」

司会・コーディネーター

滝川国芳(東洋大学文学部 教授)

<シンポジスト>

山本 佳恵 (滋賀医科大学医学部附属病院 看護師)

清岡 義文 (岡山市立清輝小学校 教諭)

小沼 公子 (当事者 家族)

<コメンテーター>

山岡 由佳 (岐阜大学医学部附属病院 看護師)

山路 翔吾 (岐阜市立城西小学校 教諭)

閉会式

援のことであるが、学術集会長である大見は自身の論文の中で、退院後、生活の適応を図る社会復帰支援の実質的な支援体制としており、退院という節目は今後の子どもの人生そのものを左右する重要なターニングポイントとなるため、復学支援は特に重要であるとしている(2016,大見)。また復学支援は、近年、医療の進歩により入院期間の短期化が進んでいる中では、さらに重要視されてくるため、今回の重要なキーワードとしたと考えられる。そこで「復学支援」及び「医療と教育の連携」を主な内容とする学術集会長講演とシンポジウムについて以下に述べる。

Ⅲ. 学術集会長講演及びシンポジウムについて

1. 学術集会長講演

学術集会長講演は1日目の開会式の直後に行われたものであり、テーマは「病気療養児の復学支援体制の構築—現状と課題—」であった。医療と教育の連携の視点は疾患や施設により様々であるが、今回は入院している小児がんの児童生徒への復学支援に重点を置いた内容であった。その後の基調講演、シンポジウムともに同様のテーマに沿って行われるため、その後のプログラムに繋げるため、学術集会のテーマ設定理由や、テーマの重要性に関するものであった。

小児がんは現在、治癒率の向上、入院期間の短期化、拠点病院の指定等、医療に大きな変化がある疾患である。その小児がんの児童生徒への復学支援の重要性について、特別支援教育や病弱教育のこれまでの変化や課題を踏まえた医療側からアプローチに関する講演であり、医療側の教育的支援に関する期待の大きさを感じる講演でもあった。また講演では、本研究所が行った研究データが数多く引用されていた。講演の中で使用していた図・表は資料配布がなかったため紹介することはできないが、病弱教育や特別支援教育に関する客観的な事実又は全国的な傾向として取り上げている印象を受けた。本研究所の研究成果に対する医療関係者からの関心の高さを感じるとともに、医療や看護等への影響の大きさを再確認する機会ともなった。

2. シンポジウム「がんの子どもの復学支援から連携を探る - 当事者の支援につなげるために医療・学校の現場の状況をもっと知ろう! -」

シンポジウムは2日目の閉会式の前に、今回の学術集会の最終プログラムとして行われたものであった。看護師、小学校の教員、当事者の保護者の3名がシンポジストであった。今回のシンポジウムを行うにあたり、大見は退院時には「子どもや家族だけでなく、受け入れる側の学校の先生方もその対応に不安や戸惑いがある」とし、「通常の学級の担任の先生方が子どもの復学を支援する場合、どのような医療と教育の連携が可能かを探ること」（「日本育療学会第21回学術集会のご案内」より）として、病院と小・中学校の通常の学級との連携を目的に挙げている。

シンポジウムでは、山本佳恵看護師から「長期療養児への効果的な復学支援～連絡カードの運用を通じて～」というテーマで、退院後に連絡カードを通じて通常の学級の教員と連携して支援を行った実践事例の紹介、小学校の通常の学級の清岡義文教諭から入院中及び退院後の学校での支援の具体的な実践の紹介があった。また当事者家族の立場として小沼公子氏からご自身の体験から学校現場や病院による支援についての意見や願いが述べられた。これまで看護師、教員、家族をシンポジストとしたものは、日本育療学会をはじめ、様々な病弱教育関係団体にて行われてきたが、教育現場からのシンポジストというと特別支援学校又は特別支援学級の教員であった。今回は小学校の通常の学級の教員という珍しいケースであり、退院後の通常の学級での支援について話し合うという重要なシンポジウムとなった。またシンポジストである清岡義文氏から医療との連携に関するご自身の実践について発言があったのはもちろんのこと、病院にある学校・学級病院との連携の難しさが述べられる等、病院・学校の連携だけでなく、学校間の連携の重要性が議論されたことも注目すべき点であった。

表5 一般演題プログラム 口頭発表

口頭発表Ⅰ	
演題	発表者
・特別支援教育担当教員の小児医療現場における協働・連携	甲斐恭子 濱中喜代 谷川弘治
・発達障害等の発達上の課題を有する子どもの「食の困難」の実態と支援ニーズに関する研究－保護者調査から－	田部絢子 高橋 智
・精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的ニーズに関する研究－特別支援学校教員を対象とした学部別による教育的ニーズの検討－	深草瑞世 森山貴史 土屋忠之
・24時間人工呼吸装用児の社会的自立に向けた心理的変容	樫木暢子 八木良 広西 朋子
口頭発表Ⅱ	
演題	発表者
・病院内教育におけるコーディネーターの役割－実践報告と今後の可能性について－	古畑晴美
・復学が見通せなくなった児童に向き合う教員の迷いの事例から－病弱教育の専門性と実態把握の重要性－	白石ゆり江 荻原節子 植木田潤
・愛知県病弱児療育研究会 30年の軌跡－院内学級のより良い療育環境を目指して－	伊藤 剛
・小児慢性特定疾病児童等自立支援事業における教育と医療・福祉との連携②－愛媛県における個別支援計画に基づいた支援について－	大藤佳子 西 朋子 樫木暢子 檜垣高史

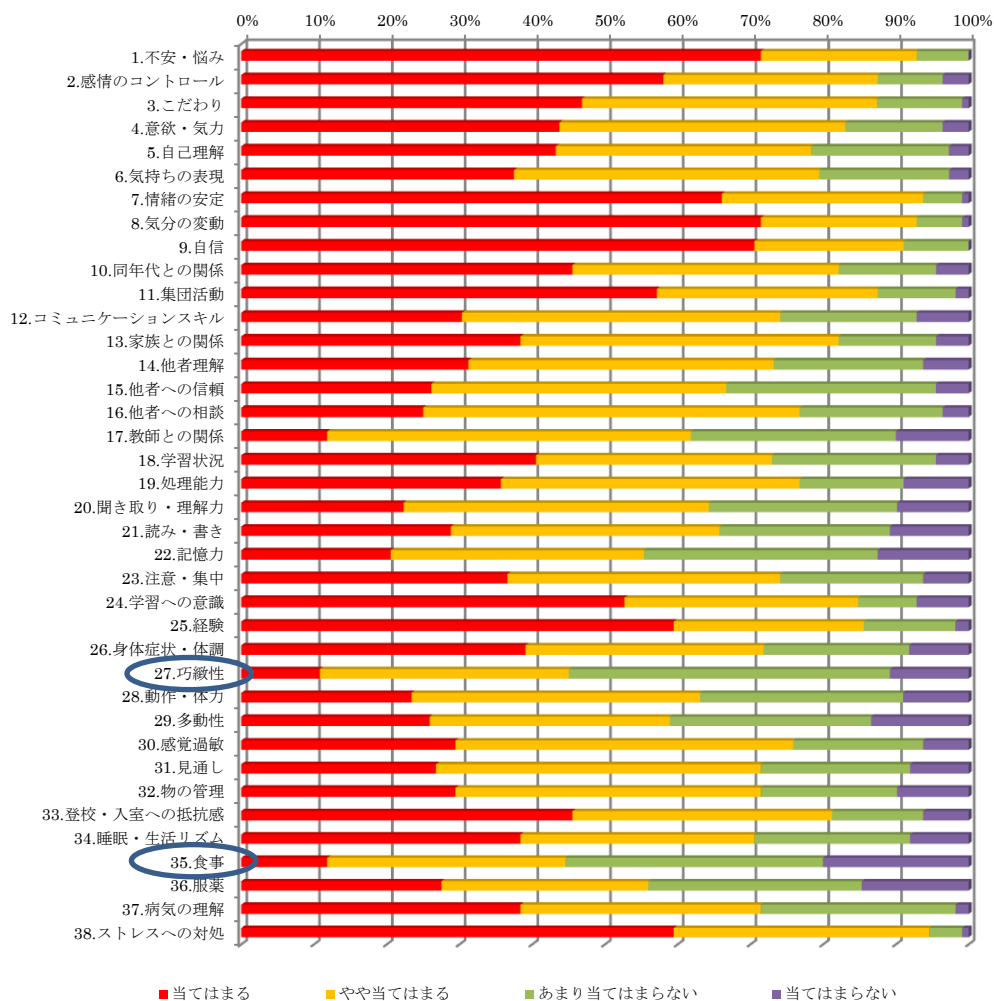


図1 精神疾患等のある児童生徒の教育的ニーズ

IV. 本研究所からの発表

口頭発表が1日目の学術集会長の講演終了後であった。今回の学術集会においても、本研究所から、病弱教育研究班を代表して深草主任研究員が「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的ニーズに関する研究 - 特別支援学校教員を対象とした学部別による教育的ニーズの検討 - 」というテーマで発表を行った。具体的な発表内容は、昨年度3月に発行した国立特別支援教育総合研究所ジャーナル第6号に掲載した「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育に関連した疫学的検討 - 全国病弱虚弱教育研究連盟の病類調査報告を含む - 」を中心としたものである。図1、図2に発表に使用した図を掲載した。この発表は学術集会のテーマに直接沿っていないものの、質疑応答では多くの挙手があり、関心の高さが

うかがえた。その理由としては、精神疾患及び心身症は特別支援学校(病弱)及び病弱・身体虚弱特別支援学級において、最も在籍数の多い疾患であり、現在の病弱教育において大きな課題となっている点が考えられた。質疑応答では3名の大学教員から質問があり、特に知的障害や発達障害の二次障害に関する意見に関心が寄せられ、二次障害としての精神疾患・心身症を取り上げていくことの重要性等の示唆が得られた。また発表後の休憩時間等では、「食事」や「巧緻性」への教育的ニーズの低さに対して、発達障害の「巧緻性」に関する点、摂食障害の「食事」について質問や意見があり、今後の研究への示唆が得られた。

口頭発表の一般演題プログラムは表3に載せた。研究所からの発表以外に、口頭発表では、甲斐恭子・濱中喜代・谷川弘治氏による「特別支援教育担当教

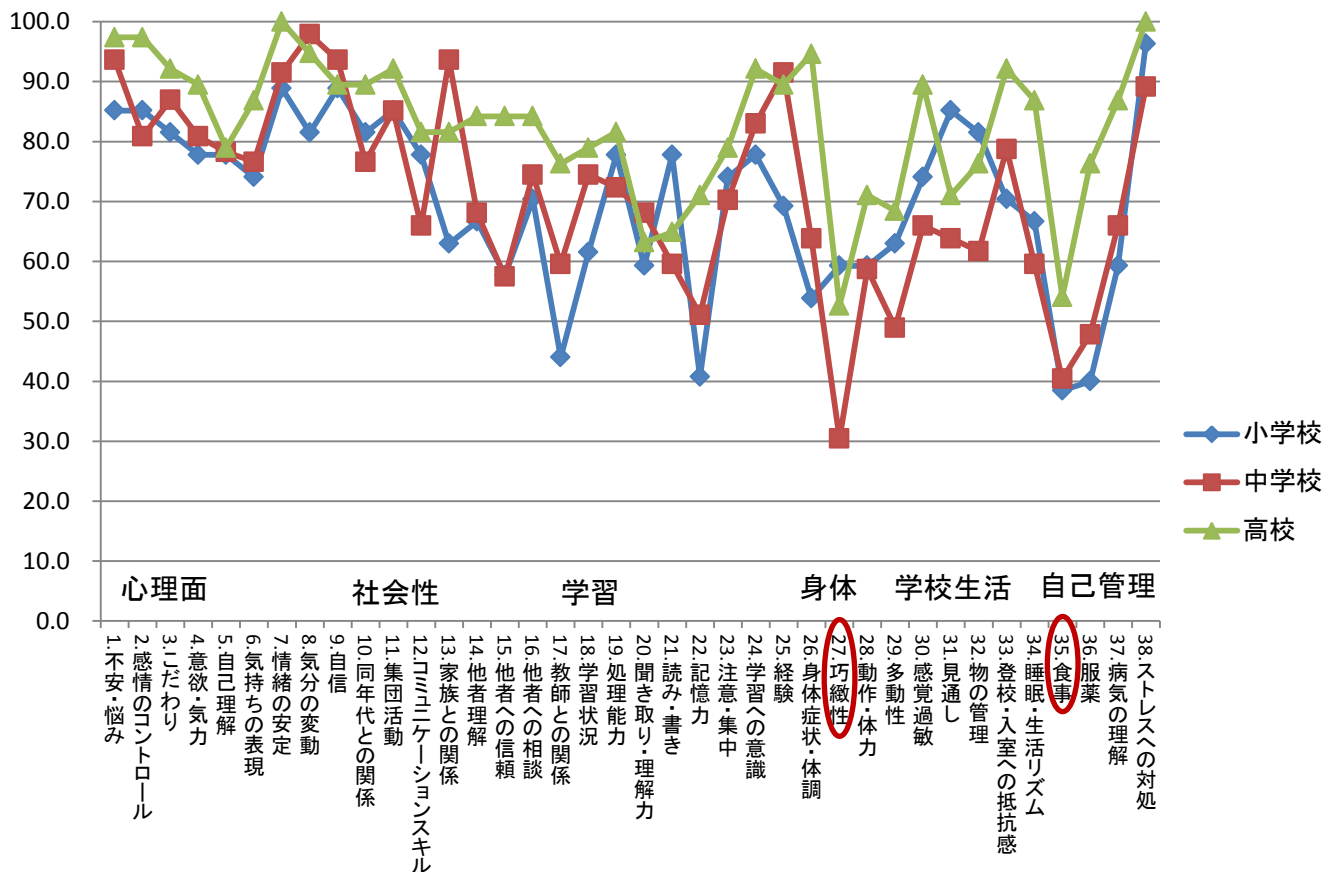


図2 教育的ニーズに対して「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した割合

員の小児医療現場における協働・連携」という連携に関するもの、白石ゆり江・荻原節子・植木田潤氏による「復学が見通せなくなった児童に向き合う教員の迷いの事例から一病弱教育の専門性と実態把握の重要性」という復学に関するもの等、今回のテーマに沿った内容のものが多かった。ただ学術集会全体のテーマに直接沿っていないものも、榎木暢子・八木良・広西朋子らによる「24時間人工呼吸装置児の社会的自立に向けた心理的変容等」等があり、多様な内容が取り上げられていた。

V. まとめ

今回の学術集会は、大きな規模なものではないが、病弱教育を中心的に推進している研究者、実践者、行政職が数多く集まるとても意義のある会であった。特に通常の学級での支援に関する議論が数多くなされ、通常の学級での病気のある児童生徒への支援の重要性が高まっていることを認識する機会となった。

また病弱教育を中心的に推進している方から意見を聞くことができ、本研究の重要性を再確認できたとともに、これからの研究への示唆が得られた会となった。次年度以降も研究を推進していくための情報を得るために、参加及び発表していく必要を感じた学術集会であった。

引用文献

- 大見サキエ(2016). 小児がん患児の復学支援ツールの開発—小学生に対する試作絵本の読み聞かせ効果と活用法の検討—. 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌, 創刊号, 4-15.
- 西牧謙吾(2011). 育療 50号の刊行にあたって. 育療, 50, 1-2.
- 文部科学省(2012). 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告).